

自閉症スペクトラム障害のある子どもの親の養育サポートに関する質的研究

Qualitative Research on Breeding of Children with Autistic Spectrum Disorder (ASD)

栗本 佳代

KURIMOTO Kayo

(和歌山県立紀北支援学校)

武田 鉄郎

TAKEDA Tetsuro

(和歌山大学教育学部)

受理日 令和4年1月31日

抄録：本研究では、不適応を起こさず学校生活を送っている自閉症スペクトラム障害（以下、ASD）のある子どもの主たる養育者へのインタビューからその養育について明らかにすることを目的とした。修正版グラウンデッド・セオリー・アプローチを用いてインタビューの分析を行い、「孤独でつらかった子育て」「サポートにならなかった専門家」「子育てを客観的に見ることから自分の子育てのスタイルを確立」「今までの子育てへの肯定的感情」「尽きない悩み・不安」「困ったときに自分から相談し、サポートを受ける力」の6カテゴリーグループが見いだされた。子どもの行動を待ったり、気持ちを十分に聴いたりする受容的な子育てスタイルや、つらい時に自分から他の人に主体的に相談する力、自分や子どもに関わってくれた人々に感謝する気持ちなどが養育をする上で重要と考察された。

キーワード：自閉症スペクトラム障害、養育、質的研究、親へのインタビュー、養育レジリエンス

1. はじめに

適応とは、人と環境との「関係」を示す概念である。両者が調和した良い関係にある状態を「適応」といい、不幸にして環境と個人との間に緊張や葛藤が生じている場合を「不適応」「適応障害」という（福島, 1989）。発達障害の領域では、二次障害とは、発達障害特性と周囲の人との関係性の中で生じる心身症や行動・精神面の合併症を意味することが多い（宮本, 2008）。行動上の問題としては、攻撃行動、非行行動、常同行動、抜毛、拒食、恐怖などへの情緒不安定、不登校、ひきこもりなどが挙げられる。すなわち、「不適応」「適応障害」も二次障害のひとつであるといえる。これらの症状のうち、周囲から見て分かりやすいもののひとつが不登校であり、不登校イコール二次障害、不適応と捉えられている（齋藤, 2011）。

不登校は、日本において大きな社会問題であり、その中には自閉症スペクトラム障害（以下、ASD とする）などの発達障害のある子どもも少なくない。不登校を主訴とする児童の19%が広汎性発達障害であり、発達障害のある子どもの10%が不登校状態であるとも言われている（齋藤, 2011）。Takahashi et al. (2009) は、発達障害児を対象とした調査において、顕著な不適応を示す事例は、注意欠陥多動性障害（以下、ADHD

とする）と高機能自閉症を合わせると7割以上を占めていると述べている。中西・石川（2014）は、自閉的傾向が高い子どもは、他児と比較して学校不適応に陥る可能性が高いことが明らかになったとしている。

これらの先行研究から、ASD等の発達障害のある子どもは、不登校などの「不適応」になりやすいと言える。しかし、同じような障害があっても、学校生活に適応している子どももいる。その違いや要因は何か。様々な可能性があろうが、ひとつとして親の養育や親からのサポートが考えられるのではないか。

子どもの発達には、家庭、特に主たる養育者（母親）の養育態度や家族のあり方が大きく影響していることは、多くの研究から明らかになっている。戸ヶ崎・坂野（1997）は、母親の養育態度が小学生の社会的スキルと学校適応におよぼす影響について、母親の拒否的な態度は児童の不適切な行動のモデルになっている可能性があり、さらに、望ましい行動を増加させるようには機能しないと述べている。戸田（2006）は、母親の養育態度と幼児の自己制御機能及び社会的行動との関係を検討している。母親が幼児を育てる過程で、自己主張や思いやり行動を育てるには、過保護や甘やかしといった行き過ぎた母親の養育行動がマイナスの影響を及ぼしていると述べている。これらは、学校や社会への適応には必要な要因であり、母親の養育と深く

関係していると考えられる。古田ら（2013）は、規制的でなく、一貫性があり、ルーズにしない、子ども中心的な養育態度が理想的で、子どものセルフエスティームやレジリエンスに良好な影響を与えると述べている。しかし、もともとセルフエスティームが高い子をもつ親が、結果としてそのような養育態度になっているという可能性も指摘し、子育てに悩み苦勞している親から見れば、理想的な養育態度はしたくてもできないというのが本音であろう、と述べている。発達障害のある子どもの親は、子育てに悩むことが多く、理想的な養育がより難しいと言える。

ASDのある子どもの母親の養育におけるストレスの高さや構造、子育てのプロセス、支援のあり方などが明らかになってきている。坂口・別府（2007）は、就学前の知的障害児通園施設の在籍児童の母親への調査から、同じ障害のある子どもの親の中でも自閉症の子どもの母親のストレスは、特に高いと述べている。山本ら（2010）は、広汎性発達障害のある子どもの母親に面接を行い、母親が子どもとの向き合い方を探しなおすためには、子育てにおける出来事を他者と共に意味づけていくことが重要である、と述べている。松岡ら（2013）は、広汎性発達障害のある子どもの母親が体験している困難と心理的支援について明らかにするために、広汎性発達障害のある子どもの母親に半構成的面接を行い、専門家による母親への心理的支援と子どもの長所や成長に焦点をあてた子どもの支援の必要性を示唆している。先行研究では、養育困難などの否定的側面に注目している事が多い。ASDのある子どもの子育てにおいて困難が多いことは、明らかであるが、多くは、困難を乗り越えて、あるいは困難と共に、一所懸命に子育てをし、子どもたちを支えているということも言える。学校や社会で不適応になる子どももいるが、適応して生活を充実させている子どももいる。

発達障害児（者）を養育している母親に焦点を絞ったうえで、養育上のレジリエンス（養育レジリエンス）を「養育困難があるにも関わらず、良好に適応する過程」と定義されている（Suzuki et al., 2013）。鈴木ら（2015）は、親意識、自己効力感、特徴理解、社会的支援、見通しで構成される養育レジリエンスのモデルを想定した。発達障害児の養育において、母親は親意識と自己効力感によって動機づけられ、子どもの特性理解を踏まえて対応策を考え、社会的支援を活用し、子どもの特徴や社会的支援に基づき成り行きを見通すことで、子どもを取り巻く問題に対する適切な対処を導き出していると述べている。

母親の育児ストレスや育児不安は、養育行動において否定的に働くと考えられる。養育行動が否定的であれば、子どもの社会や学校への適応が難しくなり、二次障害や不適応を起こすリスクも高くなる。反対に、母親の養育レジリエンスが高く、困難があっても良好

な養育を果たせるとき、子どもの不適応のリスクは低くなると言えるのではないか。母親の養育は、子どもの適応を高める要因となり得る。これを明らかにすることは、今後 ASD のある子どもの不適応や二次障害の予防につながり、これから ASD の子どもの子育てをする母親の助けになると考える。

そこで本研究では、不適応を起こさず学校生活を送れている ASD のある子どもの主たる養育者 2 名（2 名とも主たる養育者は母親であったため、以下、母親と称する）を対象に、半構造化インタビューを実施する。今までの子育てについて情報収集を行い、質的研究法の一つである修正版グラウンデッド・セオリー・アプローチ（M-GTA）による質的分析を用い、それらが子どもの発達、成長、学校生活や社会生活にどう影響を与えるのかを検討する。さらに、ASD のある子どもの養育のあり方について考察することを目的とする。

2. 方法

2.1 質的研究法の選択

ASDのある子どもの2人の母親へのインタビューから得られた発言を基に、母親が子どもに行う養育的な支援全般を検討する。母親や家族はどのように子どもを養育し、ともによりよい生活を築こうとしているのかを明らかにしていきたい。インタビューから得られた情報から、動的に支援について検討する際に、グラウンデッド・セオリー・アプローチ（GTA）が優れているとされる。GTAは、データを切片化し、概念、カテゴリー、理論を生成していく手法である。さらにGTAを活用しやすいように改良した修正版グラウンデッド・セオリー・アプローチが提案されている。この手法は、分析手順が明確であり、データを切片化せず、文脈に沿って解釈するなどの特徴がある（木下, 2003）。

2.2 対象者

2.2.1 Aの母親

Aの育ち：Aは、幼稚園で周囲に適応できず、少人数の保育園に転園するが、しつけの問題を指摘され、親子ともに叱られる日々を過ごす。母親から健診の時に医師に相談し、自閉症の診断を受けることになる。小学校就学時に市の就学支援委員会から特別支援学級の入級の判断を受けるが、特別支援学級がなかったことから、通常の学級で入学する。2年生で特別支援学級が開設され、入級。特別支援学級ではほとんど毎日、教師に叱られながら過ごす。中学年の時に釣りやマラソンをきっかけに、がんばる目的を見つけ、自分に自信をつけていった。小学5年生で通常の学級に転籍、6年生で尊敬できる教師と出会い、勉強にも励むようになり、現在、中学校は私学の進学校に通っている。

2.2.2 Bの母親

Bの育ち：Bは、2歳で知的障害を伴う自閉症という診断を受け、療育施設に通園していた。就学につき、両親は小学校と特別支援学校で迷ったが、療育施設の職員等の助言を参考に特別支援学校を選択し入学した。母親は、我が子が特別支援学校では人を信頼する気持ちを教えてもらったと言う。5年生で小学校に転校、自閉・情緒障害学級に入級する。初めは交流学級の児童とのトラブルがあったが、徐々になじめるようになった。中学校は地域の公立中学校に進学、特別支援学級に在籍しながらクラブ活動にも参加している。現在では、高機能自閉症という診断に変更されている。

2.3 データ取得

2016年の9、10月にAとBの母親に対する半構造化インタビューを行った。インタビューでは、主に幼児期から現在までの子育ての様子について語ってもらった。子どもの育ちの様子とともに、その時々の母親の気持ちや行動、周りの人々との関わり等も合わせて話してもらった。インタビュー実施後、音声データを文字に変換し、逐語記録を作成した。インタビューは、1～2時間程度であった。

2.4 データ分析の手続き

母親らからの子育てについての半構造化インタビューを主なデータとした。STEP1では、インタビューの逐語記録をエピソードや意味を大切にしながらまとまりで区切り、分析の最小単位である概念を作成した。STEP2では個々の概念の関係からカテゴリーを統合し、さらにカテゴリー間関係から上位カテゴリーグループに統合した。STEP3では、上位カテゴリー間関係の統合し関係図を作成した。

3. 結果

結果及び考察では、カテゴリーグループを「」、カテゴリーを「**【**」、概念を「**<**」、データの例を「**『**」内に示した。データの例は、方言を標準語に変更することなど、内容を変更しないように修正を加えた。また、より意味が伝わりやすいように、補足した文章や語句を「**[**」内に表記した。

3.1 インタビューの概念化 (STEP1)

STEP1では、A、B両名の母親のインタビューを概念化した。概念化は、インタビューの文脈を損なわないように文面を意味のまとまりで区切りデータとした。本研究の目的は、「学校や社会で良好な適応を示しているASDのある子どもの母親の養育について、明らかにすること」であるので、母親の気持ちとそれに関する出来事、母親や父親の子育てに関する行動等に

着目して概念を生成した。25個のインタビューの概念とデータの例を表1に記す。概念はA、Bの両名の母親の心情や、養育のやり方がそのまま伝わるように配慮し、分析した。概念化の過程は、得られた概念をより上位のカテゴリーにまとめるための前段階と位置づけられた。

3.2 カテゴリーへの統合 (STEP2)

STEP1で得られた25個の概念を11個のカテゴリーへと統合した。概念を結合したカテゴリーを表2に示す。それぞれの概念から、11個のカテゴリーを定義し、さらに4つのカテゴリーグループにまとめた。カテゴリーの定義とカテゴリーグループを表3に示す。

3.3 カテゴリー間関係 (STEP3)

カテゴリー間関係を図1に示す。

子育ての始まりは「**I 孤独でつらかった子育て**」であり、「**II サポートにならなかった専門家**」がマイナスの要素として関連する。一方で、「**ママ友**」や父親が母親をサポートし、「**10 母の支え・サポート**」として母親を支え、また母親自身の「**11 相談力**」が「**VI 困ったときに自分から相談し、サポートを受ける力**」として子育て全般にポジティブに影響を及ぼしていく。「**I 孤独でつらかった子育て**」は、「**5 子どもの行動や特性の理解**」に変化していき、サポートにならなかったと思う専門家、周囲への気持ちは「**4 周囲を客観的に見る冷静さ**」となって、冷静に周りを見るようになっていく。「**3 受容的な子育て**」は、「**4 周囲を客観的に見る冷静さ**」「**5 子どもの行動や特性の理解**」を伴って「**III 子育てを客観的に見ることで自分の子育てのスタイルの確立**」になっていく。さらに、子どもへの「**5 子どもの行動や特性の理解**」から「**8 成長を喜ぶ母**」となる。周囲への「**4 周囲を客観的に見る冷静さ**」は今まで出会った人への「**6 今までに出会った人への感謝**」の気持ちへと変化し、「**7 今までの子育てへの自信**」になっていく。しかし、子どもが学校や社会で適応できていても、母親の子育てへの悩みはなくなるわけではなく、「**V 尽きない悩み**」として、絶えず母親を悩ませることとなっている。

学校や社会で適応して生活できているASDのある子どもの子育ての出発点は、母親が「**『つらかった、しんどかった』**」と振り返るような苦勞を伴ったものであった。しかし、現在の母親は、「**『心配は、なくならない』**」と言いつつも、それまでの子育てに満足し、肯定的に振り返るまでに至っている。そこには、様々な母親自身の気持ちや養育的態度の変化が見られた。子どもとの関わりに悩み、一人で孤独にがんばっていた母親が、その悩みを自分から専門家に相談することで道が開けることがあった。また、子どもの行動や特性を理解し、それを受け入れながら、子どもに寄り添う

表1 インタビューの概念とデータの例

インタビューの概念	データの例
①子どもの行動への戸惑いや周囲の無理解でさらにつらくなる子育て	おじいちゃんおばあちゃんからもしつけしなさいって言われて、しんどかった。周りのお母さん方とも、親子教室ではあんまりしゃべれなかった。子どもは言うこと聞いてくれないし、あの時はつらかったな。しんどかった。どう育てていいのかわからなかった。
②相談したくてもできない閉じた心	発達相談行ったところで、悩みまでは聞いてくれない、という雰囲気があった。「しんどかったな」で言ってくれる人が欲しいのに。
③先生から親も叱られたことで、子どもに向けた怒り	〔幼稚園のころは〕 私たちも間違ってたね。〔ほかの子や先生に〕 迷惑かけてるし、言うこと聞かさなと思って、めっちゃ怒ってましたね。
④周りの人が障害の大変さを理解してくれないもどかしさ	保育園の先生が、障害とかに気づいてたかわからない。しっかりしつけましょう、わがままの度が過ぎてる（と言われた）。
⑤普通学級のお母さん達との距離	〔普通学級に転籍した後も〕 普通学級のお母さんとはしゃべれないんですよ。迷惑かけて謝る感じになるし。
⑥診断を受けたショック	一才半健診ですね。そこで初めて遅れがある子やわかって、そこでものすごく落ち込みましたね。最悪の状態です。
⑦医療機関への不信感	〔医療機関の言語療法に〕 どうかって言われて、通わしたけど、私の印象やけど、あんまり、何ってなかったかな。
⑧信頼しきれない教師への不満	人のせいにしたらあかんけど、もうちょっとうまいことしてくれたら、うまいこといくのという気持ちもあったんやけど
⑨怒らずに子どもにつき合う子育て	ある程度のことはやらした。命に関わることじゃなかったら、やらしてた。あんまり、制止せんとつきあってやったかもしれないですね。言うてもきかんから。
⑩子どもの意思を尊重する	〔特別支援学校から地域の小学校に転校するとき〕 本人が行くって言うまで待って、と思って。行くって言うたら、私も、行きなあ、て言った。
⑪我が子が厳しい教師への共感	〔怒られてることは〕 しゃあないやろ、て感じでした。怒られて当然やろって。座れて言って座れへんかったら腹立つやろ、あたりまえちゃうかって。
⑫子どもの行動や特性を理解して納得する	集団が嫌なのも分かるから、少人数のほうがいいんやろな、て納得した。きついこと言ってしまう。わかってなくて言う。
⑬今までに出会った人への感謝	先生とか、色んな人と関わってるとすごいいい人と当たってるな、と思うんですよ。障害持っているのは悲しいけど、いい人と出会える。それで、すごい救われてる。
⑭今までの進路選択への納得	〔特別支援学校〕 入って、人を信じられるようになった。こだわりがあって、絶対曲げられない子だったけど、「まあいいか」て思えるように教えてもらった。それを繰り返し教えてもらってからだいぶ強くなった。その土台があって、「〔地域の〕 小学校に変わりませんか」て言ってもらって、A自身が「変わる」て言えるようになった。〔特別支援学校に行くと〕 絶対よかったと思う。
⑮子どものがんばりや成長を感じるうれしさ	3年生の時に、親学級に行きたいって言い出して。そしたら〔担任が〕 運動会あるやろ、ちゃんとやったら考えるわ（と）言ってきて）先生と駆け引きしたみたいです。ここからできるようになって、練習も参加して、本番もパーフェクトでした。
⑯教師に左右される子どもへの心配	5年生になって、完全に普通学級に転籍してもらって。あの子にとっては、先生の存在がとても大きいみたいでした。ベテランの先生が引き継いで、タイプの似た感じの先生が来て、ちょっと反抗してました。
⑰将来へや進路選択への迷いと不安	提出物を出してないから成績悪いこともあったんです。提出物は絶対期限内に出すようにしなよって言うてるけど、どこまでできるかわからん。だから、高校になると難しいと心配してる。
⑱尽きない心配	朝行くのも遅い。多分、何か調べたりやってんの、行く間際になって、あれがない、これがない、なんで、夕べとかなの、て感じで。そんなんばっかし。なんか、ぼうっとしてるっていうか、直らん。
⑲友だちとのトラブルを心配する	Aが反対にやった行動で、相手を傷つけたこともあったし。女の子、なんか、いやなとこ触ってしまったりとあったり、分からずにやってしまったことやけど、Aが傷つけたって、Aが相手を傷つけることもあるんや。そこで、はじめて分かって、これは、どうしたらええんか、てずっと悩んだ。
⑳子どもが自分の障害についてどう思っているか不安	〔障害について〕 何回かは言ったけど、淡々と受け止める、ていうか。自閉、て言う言葉は知ってるけど、あんまりそれについて言わないですね。聞いてきたりもせんし。支援学校行ったこととか、今支援学級にいることとかも、あんまり、言うてないかな。
㉑保育士や先生への信頼	〔先生の言うことについて〕 ああそうか、て思う。反発して、いや、私はこうしますとか、それない。あんまり。その方がうまいこと行く気がする。
㉒相談できて得た落ち着き	親子教室の先生に相談して、発達障害、自閉症で名前ついたからって、変わるもんじゃないし、大丈夫やで、年齢と共に発達してくるし、って、だいぶ言ってくれて、ちょっと落ち着いたかな。
㉓「ママ友」とおしゃべりでストレス発散	〔しんどいとき、落ち込んだときは〕 自分の楽しいこと、趣味とかをしてみました。支援学級ができて、お母さん達としゃべちゅうしゃべってました。タイプが似てたんで。
㉔共に悩んでくれる父親の存在の認知	主人が同じ考ええてくれたから、反対一切せえへんし、そうやそうやって言って、同じ方向に行けたから、まだ良かった。子どものことはよく見てくれますね。
㉕指摘されずに自分から相談	健診では、順調ですって言われたけど、自分から小児科の先生に、幼稚園に通えてないんですが放つって大丈夫ですか、と聞いた。

子育てのスタイルを自分なりに作り上げていく。それには、「ママ友」や専門家、父親といったサポートしてくれる人がいて、母親はそれらに『支えられている』と感じることができていた。一方で、医師やカウンセラー、保育士や教師といった母親をサポートすべき存在が、時には『サポートにならなかった』とも語られている。これらの専門家から言われた言葉で傷ついたり、分かってもらえないと感じたりすることで、幼児期の子育てはいつそうつらいものになっていった。しかし、子どもの行動や特性を理解するうちに、そう

いった専門家の言動についても、『仕方がない』と、客観的に見るができるようになる。そして子どもについては、その成長を喜び、自分がしてきた子育てについても自信が持てるようになる。母親自身と子どもを取り巻く人々についても、感謝する気持ちに至っている。しかし、子育てについての悩みや不安は消え去ることなく、学校や社会で適応できていたとしても、いつも母親の頭の中にあり、母親はいつも子どものことを考え、心配しているのである。

表2 カテゴリーへの統合

カテゴリー	カテゴリーに含まれる概念
1. 孤独でつらかった幼児期の子育て	①子どもの行動への戸惑いや周囲の無理解でさらにつらくなる子育て／②相談したくてもできない閉じた心／③先生から親も叱られたことで、子どもに向けた怒り／④周りの人にこどものしんどさを理解してもらえないもどかしさ／⑤普通学級のお母さん達との距離
2. サポートにならなかった専門家	⑥診断を受けたショック／⑦医療機関への不信感／⑧信頼しきれない教師への不満
3. 受容的な子育て	⑨怒らずにこどもにつき合う子育て／⑩子どもの意思の尊重
4. 周囲を客観的に見る冷静さ	⑪我が子に厳しい教師への共感
5. 子どもの行動や特性の理解	⑫子どもの特性の理解と行動への納得
6. 今までに出会った人への感謝	⑬今までに出会った人への感謝
7. 今までの子育てへ自信	⑭進路選択への自信
8. 成長を喜ぶ母	⑮子どものがんばりや成長を感じるうれしさ
9. 尽きない悩み・不安	⑯教師に左右される子どもの心配／⑰将来や進路選択への迷いと不安／⑱尽きない心配／⑲友だちとのトラブルの心配／⑳子どもが自分の障害についてどう思っているか不安
10. 母の支え・サポート	㉑保育士や先生への信頼／㉒相談できて得た落ち着き／㉓「ママ友」とおしゃべりでストレス発散／㉔共に悩んでくれる父親の存在の認知
11. 相談力	㉕指摘されずに自分から相談

表3 カテゴリーの定義とカテゴリーグループ

カテゴリーグループ	カテゴリー	定義
I 孤独でつらかった子育て	1. 孤独でつらかった子育て	子育ての大変さを周囲に理解してもらえず、孤独感を抱えながら子どもと向きあうつらさのこと
II サポートにならなかった専門家	2. サポートにならなかった専門家	医師や療法士、教師を頼りにするが、母親のサポートにならずに落胆すること
III 子育てを客観的に見ることから自分の子育てのスタイルを確立	3. 受容的な子育て	子どもの気持ちに寄り添い、意思を尊重しながら子育てを行うこと
	4. 周囲を客観的に見る冷静さ	子どもの行動を客観的に見ること、周囲の人の対応を受け入れること
	5. 子どもの行動や特性の理解	子どもの障害特性や行動について理解し、納得すること
IV 今までの子育てへの肯定的感情	6. 今までに出会った人への感謝	周りの様々な人に子どもも母親自身も支えられていると感謝する気持ちのこと
	7. 今までの子育てへ自信	今までの子育ての中で行ってきた様々な選択について、正しかったと思うこと
	8. 成長を喜ぶ母	子どものがんばりや成長に気づき、喜ぶこと
V 尽きない悩み・不安	9. 尽きない悩み・不安	子育てのつらさが軽減されても、新たな悩みや不安ができること
VI 困ったときに自分から相談し、サポートを受ける力	10. 母の支え・サポート	周囲の人に話を聞いてもらったり、相談してサポートを受けたと実感すること
	11. 相談力	困ったときや不安なときに自分から人に相談できること

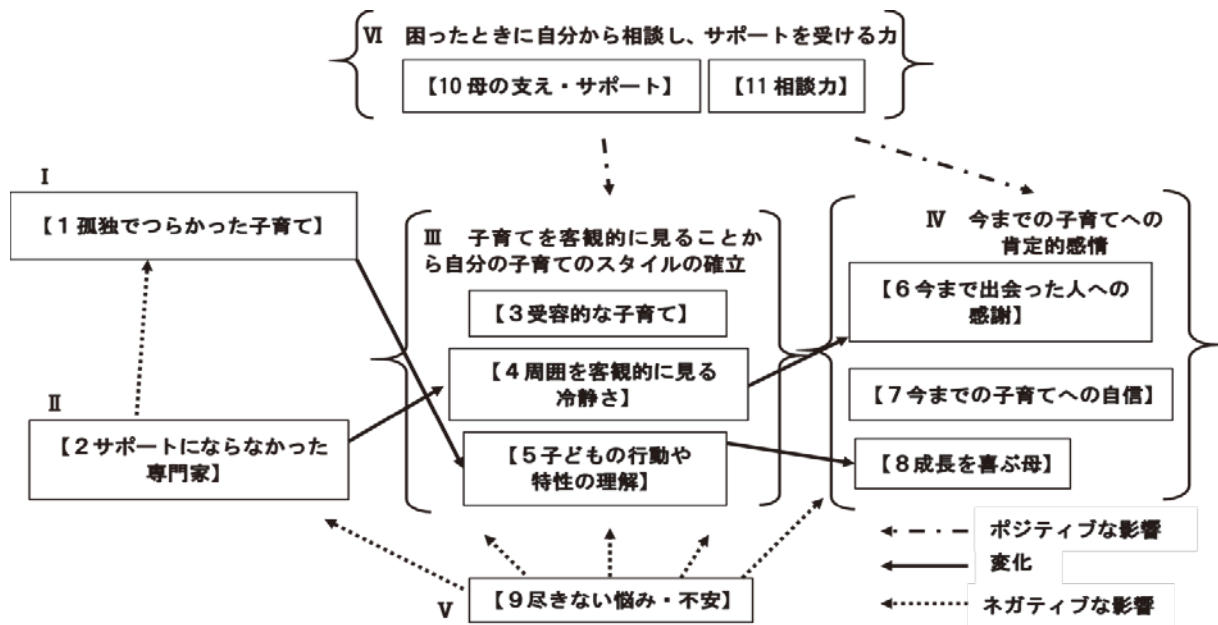


図1 カテゴリー間の関連図

4. 考察

本研究の目的“不適応を起こさず学校生活を送れている ASD のある子どもの母親の養育について明らかにすること”に沿って、インタビューの分析から得られた結果を基に考察する。

4.1 養育における母親の心情の変化

先行研究において、ASD のある子どもの子育てはつらさや不安といったネガティブなところから始まると言われている。山本 (2010) らは自閉症を主とする広汎性発達障害の子どもをもつ母親の子育てのプロセスについて、「母親が子どものことがわからず、子育ての手掛かりも得られず、また子どもとのつながりを実感しにくいという混乱の中で子どもを育てること」という『どうすればいいのかわからない』というカテゴリーから、始まると述べている。黒木 (2014) は、高機能広汎性発達障害のある子どもの母親の子どもへの関わり方と変容プロセスにおいて、母親は子どもが小さな頃から『育てにくさの積重』を経験してきたと考察している。本研究でも母親の振り返りの中で、養育は「孤独でつらかった子育て」から始まっている。この時期においては、診断がなかなかつかず、診断がついた後でも、それが活かされなかったりして障害特性の理解には至らなかった。母親は子どもの行動を理解できずに周囲の人から「しつけられていない」と言われることから自分の子育てに自信がなくなり、ひとりで悩み苦しんでいた。それゆえに母親自身の悩みを人に相談できず、孤独に耐えていた時期でもあった。この時期においては、専門家は母親の助けにならなかった。【サポートにならなかった専門家】では、「診

断がついても子どもは変わらない」、「診断があっても、先生（教師や保育士）は（子どもの特徴的な行動を）許してくれない（受け入れてくれない）」と語られるように、診断がプラスには働いていない。保健師や療育関係者からの子育てへの支援やアドバイスについても「言われてもできない」と思ったり、「しんどいと言えなかった」と振り返ったり、母親にとっては寄り添ってほしかったのに、「聞いてもらえる感じじゃなかった」と捉えられていた。

しかし、「困ったときに自分から相談してサポートを受ける力」を發揮し、「自分から相談した」「電話して話を聞いてもらった」と、自分から他者に支援を求められるようになると、それが良い方向に進むきっかけとなっていく。また、専門家に子育てについてアドバイスをもらったり教えてもらったりするよりも、ただ共感して話を聞いてくれる「ママ友」という存在に支えられながら、自分の生活のなかで「ほっとする」場所を見つけられるようになる。そのように、母親が周りとのコミュニケーションを取り戻していく中で、父親とも協力しあえるようになり、子どもに向くエネルギーが前向きなものとなっていったと考えられる。父親や「ママ友」と子どもについて話し合う中で、子どもの特性を理解できるようになり、それを客観的に見られるようになることから、周囲の対応へも一定の理解を示すようになる。子どもが教師に叱られることに対して「先生も腹立つと思う」と以前は疑問を感じていた教師の対応にも共感を示したり、友だちとのトラブルに対しても「我が子も、人を傷つけることがあるんやとわかった」と言ったり、事実を淡々と受け止められるようになってくる。

さらに【子どもの行動や特性の理解】を通して【客

観的】に子どもや周りを見れるようになってくることで、本来母親自身が持っていた「受容的な子育て」を再開できるようになる。周囲からの無理解や、子育てへの様々なアドバイスに右往左往していた時には、子どもへの接し方に戸惑い、「怒ってばかりやった」と振り返っているが、徐々に「もともとは優しくしていた」「つきあうようにしていた」という本来の自分のスタイルを取り戻し始める。「子どもが行くと言うまで待つ」「やりたいことをやらせたい」といった子どもの意思を尊重するような子育てができるようになってくる。母親は「子育てを客観的に見ることから自分の子育てのスタイルの確立」ができるようになった。母親が自分のスタイルを確立できたということは、母親自身が自分の子育てスタイルに自信を持ち始めたということとも考えられる。この時期には、子どもが小学校高学年になり、学校で子ども自身も勉強ができるようになったり、行事に子どもだけで参加できるようになったり、成長が目に見えて確認できるようになってきた。母親もその成長を目の当たりにし、「できるようになってうれしい」「今は子どもも私も楽になった」と喜び、その気持ちが自信の裏付けとなってくる。【子どもの成長を喜ぶ母】と【今までの子育てへの自信】は裏表になっている。

また、自分がやってきたことに自信を持ち肯定的に捉えるだけでなく、周囲にも感謝の気持ちを持つようになってきた。「今まで出会った人に感謝している」「我が子に障害があるのは悲しいけど、そのお陰でいい人といっぱい出会えた」と、振り返っていた。中学校へ進学した子どもが、学習面でも、クラブ活動などのその他の学校活動でも、大きなトラブルもなく学校生活を送れていることから学校や社会に適応できていると母親自身も捉えているが、それでも「尽きない悩み・不安」があり、いつも子どものことを心配している。「やっぱり忘れ物が多いから」「あまり（友だちとのことを）話してくれないから、友だちとうまくやってるか心配」「高校やその先を考えるとわからない」と現在と将来への不安はずっと存在している。養育における母親の心情の変化としては、つらい時期から始まり、悩みや不安が消えていくわけではないが、子どもが成長するとともに母親の心情も肯定的に変化したことがわかる。次に、母親がつらい時期から良好に適応できるようになった原因や理由について考察していきたい。

4.2 母親のレジリエンスについて

先行研究によると発達障害児を養育している母親について「養育困難があるにも関わらず、良好に適応する過程」を養育上のレジリエンス（養育レジリエンス）と定義されている（Suzuki, 2013）。本研究においては、現在学校や社会に適応していると考えられる ASD の

ある子どもの養育について母親にインタビューを行ったが、その中で、現在は適応していると考えられる子どもであっても、その養育は「孤独でつらかった子育て」から始まっており、養育困難を抱えながら紆余曲折を得て、子どもも母親自身も良好に適応してきたことが明らかになった。先行研究の定義によると、本研究の対象者である母親は養育レジリエンスが高いということが言えよう。鈴木（2015）は、ASD 児（者）のある母親の養育レジリエンスのモデルについて①親意識、②自己効力感、③特徴理解、④社会的支援、⑤見通しの5つのカテゴリーを挙げている。これらのカテゴリーとその概念を、本研究のカテゴリーやカテゴリーグループと比較して表4に示した。概念とカテゴリー、ネーミングの違いはあるが、その定義では、本研究の11あるカテゴリーのうち、5つは養育レジリエンスの概念と類似している。

類似していない6つのカテゴリーのうち、【孤独でつらかった子育て】や【サポートにならなかった専門家】【尽きない悩み・不安】については、本研究のテーマである養育全体を明らかにするために生成されたカテゴリーであるが、養育のマイナス面について述べられており、レジリエンスの側面とは言えない。しかし、【受容的な子育て】、【今までに出会った人への感謝】、【相談力】については、つらかった子育てから母親自身の適応に向かうための重要な要因になったと考えられる。これらのカテゴリーについては、鈴木らの養育レジリエンスモデルの概念やカテゴリーにはない要素であるが、本研究のインタビューから得られたものであり、これらの要素も母親が適応していくためにプラスに働いたと考えられる。

【受容的な子育て】では、「もともと怒らなかった」「見守っていた」という子育てをしていた母親が、周囲からの叱責や圧力の中で失いかげ、その後に取り戻した子育てのスタイルであった。母親が、子どもの気持ちや意思を尊重し、「待つようにした」「やりたいことをやらせようとした」という受容的な子育てを展開できたことは子どもの社会や学校への適応につながったと考えられる。古田ら（2013）は、規制的でなく、一貫性があり、ルーズにしない、子ども中心な養育態度が理想的で、子どものセルフエスティームやレジリエンスに良好な影響を与えると述べている。母親が【受容的な子育て】を取り戻し、自信をもってそのスタイルを続けることで母親自身と子どものレジリエンスの向上につながったと言える。

【今までに出会った人への感謝】は、本研究のカテゴリーとして、周りの様々な人に子どもも母親自身も支えられていると感謝する気持ちのことと定義されている。これは、母親にとって肯定的な感情である。「孤独でつらかった子育て」の時期は、専門家のアドバイスについても「サポートにならなかった専門家」と捉え

られており、周囲の人や環境に対して、否定的な感情を抱いていたと推察される。しかし、子育てが好転してくると「いい人と会っている」「助けられている」と、周囲の人々が自分たちのサポートになっていると認知し、感謝するようになる。レジリエンスには肯定的な感情が必要だが、この【感謝】の気持ちを持つことは周囲を肯定的に捉えていることから、レジリエンスの向上にプラスに働いているといえる。尾野 (2017) によると、子育てレジリエンスも一般のレジリエンスと同様に「I have (周囲から提供される要因)」、「I can (獲得される要因)」、「I am (個人内要因)」の三つの要因から構成されると確認されている。「周りの人に恵まれている」「いい人と出会っている」などの【今までに出会った人への感謝】は、この内の「I have (周囲から提供される要因)」に含まれると考えられる。

「孤独でつらかった子育て」の養育がうまくいかず思い悩んでいた時期から、母親が主体的に養育に取り組むようになったのは、【相談力】が関連していると考えられる。「孤独でつらかった子育て」では、「一人で

抱え込んでた」「話したくても話せなかった」と、専門家や家族、友だちなど周囲の人になかなか自分のつらさや子育ての悩みを相談できなかった。しかし、【母の支え・サポート】を受けながら、【子育てを客観的に見る】ことから自分の子育てのスタイルを確立するに至る。【母の支え・サポート】を受け、また受けていると認知できるようになるには【相談力】が働いている。つまり、母親が自分から主体的に周囲に相談したり話を聞いてもらったりできるようになることで、ストレスが解消されたり、子どもへの適切な接し方が分かったりするようになったといえる。

「養育困難があるにも関わらず、良好に適応する過程」を養育上のレジリエンスと定義するならば、「孤独でつらかった子育て」から、「今までの子育てへの肯定的感情」を持つに至った本研究での「母親らの養育」はレジリエンスが高いと言ったことができよう。そして、その内容として【受容的な子育て】、【今までに出会った人への感謝】、【相談力】が含まれている。

表 4 鈴木ら (2015) と本研究のカテゴリーの比較

カテゴリ	概念	定義
親意識	親としての自覚	子どもの親であること意識
	子どものがんばりの認知	子どもががんばっていること認知
	子どもとの連帯感	子どもとつながっているという感覚
自己効力感	自己効力感	自身の子育ての効果がある(あった)という感覚
特徴理解	障害の理解	子どもに障害があるという認識
	子どもの特徴理解	子どもの特徴や行動の理解
	発達障害に関する知識	発達障害に関する一般的な知識
社会的支援	無理解の認容	子どもの障害や対応の仕方を十分に理解してくれない人や子育てに非協力的な人もいと認めている状態
	聞き手の認知	受容的態度で接してくれる人が周りにいるという認知
	支援者の認知	困ったときに助けてくれる人がいるという認知
見通し	子どもについての予測	子どもの可能性、限界、行動に関する予測
	環境の予測	子どもを取り巻く環境の動向に関する予測

鈴木ら (2015) による質的分析結果

カテゴリーグループ	カテゴリー	定義
I 孤独でつらかった子育て	1 孤独でつらかった子育て	子育ての大変さを周囲に理解してもらえず、孤独感を抱えながら子どもと向き合うつらさ
	II サポートにならなかった専門家	2 サポートにならなかったが、母親のサポートにならずに落胆すること 3 受容的な子育て
	III 子育てを客観的に見ることから自分の子育てのスタイルを確立	4 子どもやその環境の客観的な認知 5 子どもの特性の理解
IV 今までの子育てへの肯定的感情	6 周りの人への感謝	子どもの気持ちに寄り添い、意思を尊重しながら子育てを行うこと 7 子どもの行動を客観的に見ること 8 子どもの障害特性や行動について理解し、納得すること
	7 今までの子育てへの自信	子どもの行動を客観的に見ること で、周囲の人の対応を受け入れること
	8 成長を喜ぶ母	子どもの障害特性や行動について理解し、納得すること
V 尽きない悩み・不安	9 尽きない悩み・不安	子どもの気持ちは寄り添い、意思を尊重しながら子育てを行うこと
	10 支えられたという思い	子どもの行動を客観的に見ること で、周囲の人の対応を受け入れること
VI 困ったときに自分から相談し、サポートを受ける力	11 相談力	子どもの気持ちは寄り添い、意思を尊重しながら子育てを行うこと 10 支えられたという思い
		11 相談力

栗本による質的分析結果

4.3 ASDのある子どもの養育にとって必要なこと

本研究の中で、次の仮説が生成された。

- ASDのある中学生で社会や学校に適応できている子どもでも、その幼児期の養育は、母親にとってつらく孤独なものであった。そしてその時に母親が必要としていたことは、専門家からの診断や指導的な助言ではなく、寄り添ってくれる人の共感であった。また、なかなか他の人に心を開きにくい母親の気持ちを聴ける人が必要であった。
- つらい幼児期の養育から、母親が自分の養育スタイルを確立していったその力を養育レジリエンスとするならば、それには子どもの行動を待ったり、気持ちを十分に聴いたりする受容的な子育てのスタイルや、つらくて孤独な時に自分から他の人に主体的に相談する力、そして自分や子ども、その養育に関わってくれた人々をポジティブに捉え感謝する気持ちなどが大きく関わっている。

上村（2007）は、保護者面談において教師が保護者との連携を構築するプロセスとして、「援助具体化」と「保護者との関係構築」を挙げている。「保護者との関係構築」のプロセスは、保護者の話を傾聴していることを示す〔傾聴的発言〕や自らの感情や体験、価値観を伝える〔自己開示的発言〕、保護者をねぎらう〔社会的発言〕で構成されている。これらは、援助の具体化に直接関係しないが、保護者との関係を構築する上で大切だと結論づけられている。本研究では、母親がつらさを感じている時期には、指導的な助言は母親に届きにくかったという結果が得られている。医師やカウンセラー、保育士、教師といった専門家は、母親と接する際に、最初から指導や助言をするのではなく、まず母親の話を聞き、共感を示し、母親との信頼関係を十分に構築してから指導や助言を提示するべきである。

幼児期の養育困難に対する社会的な資源は少しずつ整ってきているだろうが、それを十分に活用できていない事例は少なくない。子どもの行動や、自分の子育てに疑問があってもなかなか自分から相談しに行く勇気が出ない人も多いだろう。そのような時、専門家でもなくても気軽に話を聴いてくれる存在がいることで、道が開けることもある。最近は多くの自治体で、子育てルームなど子育てについて親同士で話し合う場が増えてきている。しかし、障害を持っているのではと悩んでいる親にとってはそういった場も行きにくいだろう。健診などで、悩んでいる様子の親に保健師や保育士などが声をかけ、話を聞くことから、親への支援は始まると言える。親をサポートする立場の人間は、まず指導や助言ではなく、話を聴き親のつらさを理解するところから出発するべきであることが本研究から示唆された。

5. 本研究の限界

今回の研究の対象者は、2人であり理論的飽和に達するまで、つまり、理論やモデルが形をなし、それを使えば新たなデータも説明ないし了解が可能になるまで、サンプリングは続けられることになる。理論的飽和とは、カテゴリーを発展させる中で、これ以上新しい特性、次元、あるいは関係が生じてこなくなる分析上の一時点である（Strauss & Corbin, 1999）が、対象者である母親の養育に関する状況は多様であり、理論的飽和に達するには十分に至っていない可能性が残る。今後、同様の分析を続けていくことでより確かな仮説生成を行っていききたい。

6. まとめ

本研究では、不適応を起こさず学校生活を送っている ASD のある子どもの主たる養育者へのインタビューからその養育について、修正版グラウンデッド・セオリー・アプローチを用いてインタビューの分析を行い、「孤独でつらかった子育て」「サポートにならなかった専門家」「子育てを客観的に見ることから自分の子育てのスタイルを確立」「今までの子育てへの肯定的感情」「尽きない悩み・不安」「困ったときに自分から相談し、サポートを受ける力」の6カテゴリーグループが見いだされた。子どもの行動を待ったり、気持ちを十分に聴いたりする受容的な子育てスタイルや、つらい時に自分から他の人に主体的に相談する力、自分や子どもに関わってくれた人々に感謝する気持ちなどが養育をする上で重要であることが明らかにされた。

文献

- 福島章編（1989）、適応と不適応 性格心理学新講座、第3巻、金子書房
- 古田加代子・長谷川真美・原都水・伊藤瑞希・長崎衣里子（2013）、親の養育態度が小学生のセルフエスティームとレジリエンスに及ぼす影響の検討、東海学校保健研究、37（1）、53-63
- 木下康仁（2003）、グラウンデッド・セオリー・アプローチの実践：質的研究への誘い、弘文堂
- 黒木八重子（2014）、高機能広汎性発達障害者をもつ母親の子どもへの関わり方変容プロセス：母親へのインタビューの分析を通して、九州社会福祉学10）、27-38
- 松岡純子・玉木敦子・初田真人・西池絵衣子（2013）、広汎性発達障害児をもつ母親が体験している困難と心理的支援、日本看護科学誌、33（2）、12-20
- 宮本慎也（2008）、二次障害 発達障害基本用語辞典、金子書房、31
- 中西陽・石川信一（2014）、自閉的特性を強く示す中学生の社会的スキルと学校適応、心理臨床科学、4（1）、3-11
- 尾野明美（2017）、障害のある子どもを持つ母親の子育てレジリ

エンス、教育と医学、65 (11)、34-41

齋藤万比古 (2011)、発達障害が引き起こす不登校へのケアとサポート、学研教育出版

坂口美幸・別府哲 (2007)、就学前の自閉症をもつ母親のストレスの構造、特殊教育学研究、45 (3)、127-136

Satoru TAKAHASHI, Ayumi Ubukata (2009), Supports for Adjustment Problems of School-Age Youth with Deelopmental Disabilities : A Survey of People With Developmental Disabilities, *The Japanese Journal of Special Education*, 46 (6), 525-543

Strauss, Anselm L. & Corbin, Juliet M. (1999) Basics of qualitative research: grounded theory procedures and techniques. Sage Publications, Inc. 操 華子・盛岡崇 (訳) (2004) 質的研究の基礎—グラウンデッド・セオリー開発の技法と手順. 医学書院.

Suzuki K, Kobayashi T, Moriyama K, Kaga M, Inagaki M. (2013), A framework for resilience research in parents of

children with developmental disorders, *Asian Journal of Human Service*, 5, 104-111.

鈴木浩太・小林朋佳・森山花鈴・加我牧子・平谷美智夫・渡部京太・山下裕太郎・林隆・稲垣真澄 (2015)、自閉症スペクトラム児(者)をもつ母親の養育レジリエンスの構成要素に関する質的研究、脳と発達、47、283-288

戸田須恵子 (2006)、母親の養育態度と幼児の自己制御機能及び社会的行動との関係について、釧路論集—北海道教育大学釧路校研究紀要一、38、59-69

戸ヶ崎泰子・坂野雄二 (1997)、母親の養育態度が小学生の社会的スキルと学校適応におよぼす影響—積極的拒否型の養育態度の観点から—、教育心理学研究、45、173-182

上村恵津子・石隈利紀 (2007)、保護者面談における教師の連携構築プロセスに関する研究、教育心理学研究、55、560-572

山本真美・門間晶子・加藤基子 (2010)、自閉症を主とする広汎性発達障害の子どもをもつ母親の子育てのプロセス、日本看護研究学会雑誌、33 (4)、21-30